

利用者の意向を取り入れた高齢者向けスマートホームの研究

○星野雅人 (Masato HOSHINO)、中村広幸 (Hiroyuki NAKAMURA)

Keywords: スマートホーム、高齢者、インタビュー調査、自律生活支援、モデル提案

1 目的

本研究の目的は高齢者向けスマートホームの利用者の意見をインタビューによって明らかにし、その結果に基づいた新たな高齢者向けスマートホームのモデルを提案することにある。多機能住宅「スマートホーム」はより便利・安心した生活を提供できるとして注目されているが、当分野では技術的側面が先行し、利用者視点の知見が不足している傾向にある[1]。一方、高齢者向けスマートホームは我が国における少子高齢化の諸問題解決へ貢献できるとして注目されている。そこで本研究では、不足した知見を補うため、高齢者向けスマートホームの利用者と想定される人へインタビュー調査を実施し、その結果を基に新たな高齢者向けスマートホームのモデルを提案する。本発表では、新たに実施した高齢者への調査結果及び従前の調査結果に基づいた高齢者向けスマートホームのモデルを報告する。

2 方法

実査は高齢者 39 人に対して行った。インタビューは、筆者が文献調査等によって作成した高齢者向けスマートホームのモデルを用いて機能・機器の説明を行った。本モデルは「健康状態把握」「防犯」「家電・操作」「緊急通報」「コミュニケーション」の 5 つの機能で構成されている。このモデルを用いてスマートホームデバイスの説明を行った後、対象者個々に機能・機器の意見を尋ねた。

3 結果

最もスコアの高いものは「緊急通報」における自動緊急通報機器であり、33 人が肯定的に評価した。次いで遠隔医療システム、家電の危険通知機能への評価が高かった。回答者は、将来的な身体的・精神的変化に伴う不安を理由として挙げている。

それに対し、防犯に関する機器は、スコアが低く、「地域の治安の良く、防犯の必要がない」「盗まれたくない貴重品がない」「集合住宅の防犯機器で十分」との意見が散見された。

一方、健康管理システムや、生活見守りセンサーに対しては肯定的な意見と否定的な意見が拮抗している。肯定的な人は、より便利な生活と安心を求め、否定的な人は、自動化に対する抵抗感を示す傾向にあった。

4 結論

本調査により、高齢者から見た、高齢者向けスマートホームのニーズが明らかになった。また、それは身体的・精神的変化といった、高齢者自身の状態だけでなく、地域特性や住宅の種類・状態、これまでの生活習慣等、様々な要因によって異なることが判明した。今後は、これらの結果を分析し、これまでに調査した高齢者向け施設のスタッフ及び高齢者の家族から得た意見と総合し、想定されるユースケースに基づいた、新たな高齢者向けスマートホームのモデルの提案につなげる。

【主要参考文献】

[1]Jung woo,Shina Yuri Park,Daeho Leec, 2018, “Who will be smart home users? An analysis of adoption and diffusion of smart homes”, Technological Forecasting and Social Change, 134, 246-25